

作品名をクリックすると作品に移動します。

「全国高校生読書体験記コンクール」中央入賞者一覧（敬称略）

【文 部 科 学 大 臣 賞】 高知県 高知学芸高等学校 二年

やすみつえい
安光英美 「We」を広げて
（体験書籍『海と毒薬』遠藤周作・著）

【全国高等学校校長協会賞】 石川県立金沢桜丘高等学校 三年

なみむらのぞみ
中村望美 青い、スーッとするような絵
（体験書籍『絵のなかの散歩』洲之内 徹・著）

【全国高等学校校長協会賞】 徳島県立脇町高等学校 二年

つじ まきこ
辻真紀子 幸せの種はそれぞれの心の中に
（体験書籍『母は枯薬剤を浴びたーダイオキシンの傷あと』中村梧郎・著）

【一ツ橋文芸教育振興会賞】 東京都 女子学院高等学校 一年

いとうともか
伊東朋香 ままならぬままに
（体験書籍『ままならないから私とあなた』朝井リョウ・著）

【一ツ橋文芸教育振興会賞】 新潟県立長岡高等学校 二年

さいとうすみと
齋藤淑人 言葉という心臓
（体験書籍『人間失格』太宰 治・著）

【一ツ橋文芸教育振興会賞】 静岡県 浜松市立高等学校 三年

きたがわなおこ
北川奈央子 ピエロに救われて
（体験書籍『中原中也詩集』中原中也・著 河上徹太郎・編）

【一ツ橋文芸教育振興会賞】 兵庫県立北摂三田高等学校 一年

あだちたくま
足立拓真 陽が昇り始めた僕等
（体験書籍『落日燃ゆ』城山三郎・著）

【一ツ橋文芸教育振興会賞】 山口県立熊毛南高等学校 一年

おだ ひろみ
小田 瞳 「なぜ」
（体験書籍『ハリネズミの願い』トーン・テレヘン・著 長山さき・訳）

「全国高校生読書体験記コンクール」について

このコンクールは、公益財団法人一ツ橋文芸教育振興会が、文部科学省、全国都道府県教育長協議会、全国高等学校長協会、各地の新聞社、集英社などのご後援をいただき、「高校生のための文化講演会」とともに毎年実施している事業で、多くの高校生ができるだけたくさんの本と出会うきっかけをつくることを目的としています。「感想文」を綴るだけにとどまらず、読書によって自分が何に気づき、どのように行動したかをふりかえることが大切であると考え、「読書体験記」といたしました。

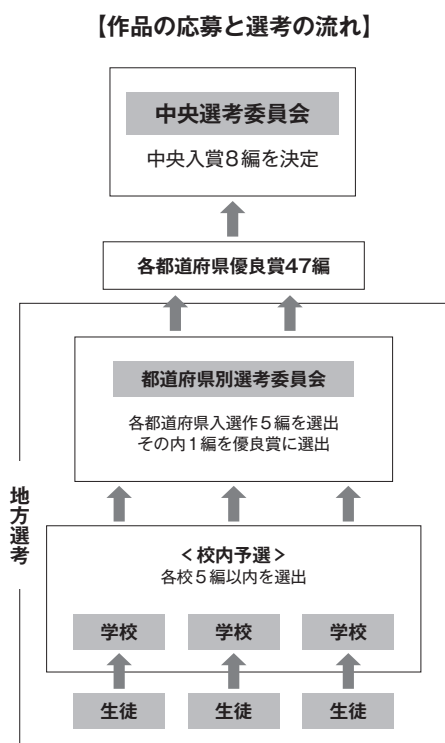
第37回の本年度は、全国47都道府県から427校の参加があり、応募作品は110、190編となりました。

【選考】

◎生徒から提出された応募作品は、各学校の校内予選により5編以内が選ばれ、都道府県別の応募先に提出されました。

◎その後、都道府県別選考委員会において、「都道府県入選」5編が選ばれ、その中で「優良賞」とされた1編が中央選考委員会に送られました。

◎各都道府県で選ばれた「優良賞」合計47編の中から、中央選考委員会において、文部科学大臣賞・全国高等学校長協会賞・一ツ橋文芸教育振興会賞の「中央入賞」作品8編が決定しました。



【賞】

中央入賞 8名

- ・文部科学大臣賞 1名 賞状・楯・記念品
- ・全国高等学校長協会賞 2名 賞状・楯・記念品
- ・一ツ橋文芸教育振興会賞 5名 賞状・楯・記念品

*中央入賞者8名と付添い教師(各1名)を東京へ招待し、表彰します。

*中央入賞者在学の8校には「学校賞」として、楯および「集英社文庫100冊セット」を贈呈します。

優良賞 39名 賞状・記念品

*優良賞受賞者在学の39校には「学校賞」として「集英社文庫50冊セット」を贈呈します。

入選 185名 賞状・記念品

*入選者在学校には「学校賞」として「集英社国語辞典」を贈呈します。

【中央入賞者表彰式】

2018年1月29日(月) 東京・水道橋 東京ドームホテル

【中央選考委員(敬称略)】

辻原 登(作家)

穂村 弘(歌人)

角田光代(作家)

清原洋一(文部科学省初等中等教育局主任視学官)

角 順二(全国高等学校長協会)

【主催】

公益財団法人一ツ橋文芸教育振興会

【後援】

文部科学省・全国都道府県教育長協議会・全国高等学校長協会・集英社

北海道新聞社・東奥日報社・岩手日報社・河北新報社・秋田魁新報社・山形新聞社・福島民報社・上毛新聞社・産経新聞社・神奈川新聞社・山梨日日新聞社・信濃毎日新聞社・新潟日報社・北日本新聞社・北國新聞社・福井新聞社・岐阜新聞社・静岡新聞社・中日新聞社・京都新聞・神戸新聞社・山陰中央新報社・山陽新聞社・中国新聞社・徳島新聞社・四國新聞社・愛媛新聞社・高知新聞社・西日本新聞社・佐賀新聞社・長崎新聞社・熊本日日新聞社・大分合同新聞社・宮崎日日新聞社・南日本新聞社・琉球新報社

【地方主催】

北海道高等学校文化連盟図書専門部会・青森県高等学校文化連盟文芸専門部会・岩手県高等学校文化連盟文芸専門部会

【文部科学大臣賞】

「We」を広げて

「いつてきまーす!」。パンを頬ばりながら自転車に飛び乗る。早朝練習開始まであと二十分。今日もまたギリギリか。ペダルを踏み込む。部活、授業、友達とのたわいない語らいで一日があつという間に過ぎていく。夕食の向こうで流れるスペインでのテロのニュース。今年に入つていったい何件目のテロだったっけ…。

そんな夏休みのある日、本屋に出かけた。『海と毒薬』——タイトルが目飛び込んでくる。おおよそ結び付かない二つの言葉に

魅かれ裏表紙を見る。「戦争末期の恐るべき出来事：米軍捕虜の生体解剖事件」。医学部を進路の一つとして考えているからか、怖いもの見たさからか、私は一気に読み始めた。

腕は確か、しかし、金属のような冷たい手を持つ勝呂医師は、大学附属病院で生体解剖事件に携わった過去を持っていた。どうせ殺す命なら医学の発展のためにという錦の御旗の下、実際には、医学部内での出世争いや倫理観なき探究心の犠牲者として

捕虜が殺される姿が描かれる。若手医局員の勝呂は、人体実験に参加しないという選択肢が与えられたにも拘らず、大きな渦の中に巻き込まれていく。

この小説が実話に基づいたフィクションであると知り、七三一部隊、アウシュヴィッツ等で行われた人体実験についても貪るように調べた。湧き出てくる大きな疑問を解き明かしたかった。川で溺れた見知らぬ人を助けようと命を落とすのも人間、人体実験をするのも人間。真逆の行動を生み出

高知県 高知学芸高等学校 二年

安光英美

すその背景はいつたい何なのだろう。そして、勝呂の言葉が蘇ってくる。「仕方がないからねえ。あの時だつてどうにも仕方がなかったのだが、これからだつて自信がない。これからもおなじような境遇におかれたら僕はやはり、アレをやつてしまふかもしれない」。人間を生きたまま解剖してしまふ、その「境遇」とは。夢中で資料を漁る中、ある共通点を見つけた。七三一部隊の「丸太」、アウシュヴィッツの「モルモット」。被験者たちはこう呼ばれていた。小説の中では、敵である中国人を「チャンコロ」と呼ぶ場面もあった。殺されていった人達は皆、名前がないどころか、モノや動物として扱われていたのだ。同じ血の通う人間としての「We」ではなく、何か別のモノ・生物としての「They」として。そして、被験者たちが「They」になった瞬間、彼らに対する共感が消え去り、Weの利益追求の道具として利用されていく。あたかも自分を中心にWeの円があり、その境界線の外側の「They」とはいつでもよくなくなつてしまつたかのように。

第二次世界大戦中は「鬼畜米英」という言葉があつたと聞く。敵を鬼や畜生と思えば殺しやすいかもしれない。しかし、自分と同じように赤い血が流れ、家族もいて、痛みも感じる「人間」であることを認識した瞬間、簡単に殺すことはできなくなるだろう。それは私が身をもつて断言できる。私の祖父母が子どもだつた時代、「鬼畜」だつたイギリス人、「ad」だつた日本人。それが私の父と母だ。鏡の中の自分の顔を見つめ、ドイツ軍と戦つた大伯父、私と初めて会う数時間前に病没したイギリスの祖父、その祖父亡き後も一人暮らしで頑張つてゐる祖母、そして一緒に暮らしてゐる日本の祖父母を想つた。確かに私の中に流れてゐる二つの国の血を感じながら。そして、「ガイジン（＝They）は○○だからなあ」というステレオタイプな言葉を耳にする時の悲しいような、反発したいような気持ちが沸き起こつてきた。「違ふよ、私たち（＝We）日本人と同じところが沢山あるよ」と。同時に、自分自身のWeの円がとても小さいことにもはつと気付いた。シリア難民、テロの被害者、差別されるイスラム教徒、世界中に広がる人種間の争い……。日々、テレビや新聞で取り上げられているにも拘

らず、私は小さいWeの中で安穩と日々を過ごしてきた。「死者・負傷者〇人、難民〇人」と報道される「They」のことはニュースの中だけでの出来事としてしか認識していなかつたのだ。彼ら一人一人にも私と同じように名前があり、家族がいるというのに！

地球規模の環境破壊、国家・人種・宗教間の争い、難民問題……。あまりにも問題が大きすぎ、安全なWeの中に留まり、その外側の「They」については見えないふりをしたくなつてしまふ。しかし、その境界線を引くのは自分自身だ。そのことに気づいた今、私は、その境界線をどこまで広げられるか、自分に挑戦し続けたい。

新学期まであと数日。また毎朝自転車に飛び乗つて始まる慌ただしくも平和な毎日が待っている。でも、これまでの日々とは違ふ。新たな目で、耳で、心で、一步一步私のWeを広げていこう。大海の一滴が少しずつ水紋を広げ、他の水紋と交わり、一つになつていくように。

体験書籍

『海と毒薬』遠藤周作・著

【全国高等学校長協会賞】

青い、スーツとするような絵

石川県立金沢桜丘高等学校三年

中村望美

仙台の空は青い。

以前、仙台から転校してきた先輩が、「金沢で暮らしていると、時折やっつけられなくなる」と言っていたが、意味が全然分からなかった。

けれど、この真っ青な空を見て、さもあらんかと思った。金沢は、どんなに晴れても、空がこんな呆れるみたいな青にはならない。

なぜ私が、七夕祭直前の仙台にいるのかといえば、今年の高等学校全国総文祭が宮城県で開催されたからだ。会場は仙台国際センター。すぐ近くの宮城県美術館は、美術・芸術部門の会場で、文芸部門に参加する私は、徒然なるまま美術館を訪れてみる

ことにした。

エントランスに並ぶ、各県の高校生によるエネルギーに満ちた作品群を鑑賞したあと、隣に常設展があるのを認め、ふと足を運んだ。

部屋をひとつ過ぎると、「洲之内コレクション」という一画があり、一枚目には、死んだ鶉の絵があり、その横には次のようなコメントがあった。「どんな絵がいい絵かと訊かれて、ひと言で答えなければならぬ」としたら、私はこう答える。――「買えなければ盗んでも自分のものにしたくなるような絵なら、まちがいなくいい絵である」と。分かったような分からないような言葉だ。でも、少し離れてその絵を見てみる

と、横たわる鶉は、寸前まで生があったかのように光り輝いて見えた。

その何枚目か左に、「ポアソニエール」と題する、青魚の入った箸を頭にのせた少女の絵があり、その前で私は忽然動けなくなった。

その絵についての洲之内の言葉は、次のようである。「こういう絵をひとりの人間の生きた手が創り出したのだと思うと、不思議に力が湧いてくる。人間の眼、人間の手というものは、やはり素晴らしいものだと思わずにはいられない。他のことは何でも疑ってみることもできるが、美しいものが美しいという事実だけは疑いようがない」。

翌日の文学研修では、一ノ丸、二ノ丸、三ノ丸、文学館を巡った。一ノ丸は仙台城趾、二ノ丸は東北大学、三ノ丸は博物館、とりわけ、文学館にある井上ひさしの「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをゆかいに、ゆかいなことをまじめに、書くこと」ということが琴線に触れた。

引率の先生は、二十回以上全国総文祭に参加しているが、今回の宮城ほど情理を尽くした大会は経験したことがないと言っていた。

昨年参加した広島大会も良かったが、確かに私も今大会の実行委員の高校生の応対は素晴らしいと感じており、多分それは周到で懇ろな準備に拠るものだと思っていた。しかし、バスの中で、私と同年の女子高生の次のような一言で、本当の理由が分かった。

「二〇一一年三月十一日に発生した東日本大震災の時には、私はまだ小学生でした」

私も同い年なので、小学生だった。もとより、東北地方太平洋沖地震とそれに伴う津波のことは、報道等で知ってはいた。ただ、金沢は不思議なほど災害に遭わない街

で、そのせいか、やはり実感は乏しかったように思う。

そしてその時、もう一つ分かったことがある。それは、なぜ愛媛県松山市出身の洲之内徹のコレクションが、遠く宮城の地に來ることになったのか、ということについてである。そのことに気付いたのは、昨年の広島文学逍遙での、尾道のボンボン蒸気船が浮かぶ海のことを、何となく思い出した時であった。

私が暮らす加賀の海は日本海。洲之内の伊予の海は瀬戸内海。そして陸前の海は太平洋である。それぞれの海は、それぞれ全く別の顔を持つ。ベタに言えば、日本海は暗く、瀬戸内海は穏やかで、太平洋は明るい。けれども、一旦天災が起これば、漁港を含めて、津波はあたり一帯の町ごと、呑みこんでしまう。

前述の先輩は、その後東北大学に進学し、仙台に戻った。たまに來るメールには、必ず掉尾に、「金沢が懐かしい」とある。「やつてられなくなる」といった癖に、いい気なもんだなと思う。でも、気が付いたことがある。

日本海も瀬戸内海も太平洋も、書き割り

の富士山がある銭湯の男湯と女湯みたいに端然と分かれている訳ではない。日本は島国なので、畢竟全ての海は、手をつないで大きな輪を作るように、繋がっている。ひいては、「ポアソニエール」の少女は、フランスの少女でもあり、四国の少女でもあり、東北の少女でもあり、北陸の少女でもある。彼女の瞳を仔細に眺めてみると、カンバスの地の色として塗られた深い碧の色がそのまま残されているのが、遺憾なく分かる。彼女の瞳に漂う深い憂いは、映された海の色に他ならない。

私達の周りに起こることは、因果関係に基づくとは限らない。だから、時には不条理に立ち尽くす。その時には、その悲しみを抱きしめ、皆でその悲しみを分かち合うしかない。分かち合うなかで、悲しみは私達に寄り添う。

「集え伊達の地に 創造の短冊に思いをのせて」。東日本大震災から九六年を過ぎて、七夕祭直前のささやかな大切な体験であった。

体験書籍

『絵のなかの散歩』洲之内 徹・著

【全国高等学校長協会賞】

幸せの種はそれぞれの心の中に

徳島県立脇町高等学校 二年

辻真紀子

「枯葉剤とは除草剤の一種で、米軍は森林を枯死させるためベトナム戦争で大量使用した」。昨年の社会の授業中、先生が力説されていた。そのとき何かが私の脳裏をよぎった。何だろう？ 放課後になってやっと思い出した。そうだ、あの写真。自宅の本棚にあった古い本。そこで目にした数多くの幼子たち。手足が無かったり、口が裂けていたり、上半身二つが一つの下半身に繋がった双子の赤ちゃんの姿さえあった。あまりにむごい写真の数々に私はすぐ本を閉じてしまった。小学生の頃のことである。

私は学校から帰ると書斎に直行した。その本の題名は『母は枯葉剤を浴びた』。私はすぐさま読み始めた。

枯葉剤作戦を実行した末端の米軍兵士によると「枯葉剤は無害、人的被害は何も無い」と教えられていたそうだった。何が人畜無害だ。植物にしか効かないだなんて。私は深い憤りを感じた。枯葉剤作戦は別名「牧場夫作戦」と呼ばれた。つまり、米軍上層部にとってベトナム軍兵士や散布地域で暮らす人々は牧場に生える草同然の存在で根絶やしにして当然、同じ「人間」という意

識は無かったのだろう。当時、散布地域では流産や死産が目立ち、無事誕生した子も奇形児が多かったという。この本を読み進めるにつれ、私は心臓を握り潰されたように苦しくなった。この赤ちゃん、そしてこの子を産んだ母親、胸が張り裂けるくらい辛かったろうな。涙で目がかすんで読めなくなつた。あまりにも悲惨な現実を目の当たりにし、私の心と頭では到底処理することができず途方に暮れてしまった。

今春、私はベトナムでのボランティア活動に参加した。枯葉剤という非人道的な事

実を知ったのにそのままにしている自分が嫌だったからだ。活動場所はホーチミン市ツーズー病院の枯葉剤リハビリ施設平和村、枯葉剤による障害を持つて生まれた人が暮らし治療を受ける施設だ。活動前にはメンバー全員で戦争証跡博物館を訪れ、ベトナム戦争について学んだ。大量の枯葉剤を空中から散布する米軍機の映像と苦しみ悶え道端で息絶える人々。全身に後遺症が残る親と四肢が曲がり目が無く唇裂の障害を負う子ども。目を背けたくなるような悲惨な現実がそこにはあった。予想をはるかに超えた衝撃で私は声も出なかった。

続いてツーズー病院標本室も訪れた。棚には多くのガラス瓶が並び、その中にはホルマリン漬けされた胎児や死産で生まれてきた赤ちゃんがいた。そうなのだ。枯葉剤の被害者は決して障害を持つて生まれてきた子どもだけではない。この世に生まれ出ることすら許されなかった数多くの命があったのだ。生々しい現実を突きつけられ、私はすっかり怖じ気づいてしまった。「子ども達を勇気づけたい」という当初の意気込みは無残にも打ち砕かれ、浅はかで無知な自分が子ども達と一体どう向き合えば良

いのか、全く考えも定まらず、気が動転したまま平和村に向かった。

悪い予感通り、平和村で初めて子ども達を見た時、私は内心ぎょっとした。これが偽りのない正直な気持ちだった。なぜなら本の写真ではない、博物館のモノクロ映像でもない、重い障害を抱え現実に生きている子ども達が目の前にいたからだ。私の顔はきつと引きつっていたに違いない。情けないことに私は立ちすくんで動けなくなってしまった。

ところが次の瞬間、なんと子ども達が満面の笑みで私の方に駆け寄って来てくれたのだ。小さな手で「こっちよ」と言わんばかりに私の腕を引っ張り案内してくれた。一緒に絵描きや折り紙をした。膝の上に座る子とベトナム語会話を片手に話をした。そんな触れ合いの中で私の心は次第にほぐれていき、暫くすると笑い合いながら楽しく過ごす自分がいた。そう、彼らの笑顔が私の心の中にあつた大きな壁を打ち壊してくれたのだ。

ベトナムでの活動中、病院職員として勤めるドクさんが私たちを自宅に招いてくれた。あの「結合双生児ベトちゃん・ドクち

ゃん」のドクさんである。手術直後で体調は良くなかったはずなのに、日本から来た若者のために時間を割いてくれたのだ。それは私にとってかけがえのない語らいとなった。人間とは、国際理解とは、平和とは。こんなにも真剣に考えたことは今まで一度も無かった。そして私はようやく気がついたのだ。自分は偏見に満ちた差別者であったことを。差別など絶対しないと信じ込んでいた。そんな私こそ己の心の奥底に潜む差別心に目を向ける努力が必要だ。枯葉剤の問題は決して過去の歴史ではない。半世紀経った今もなお続く現実だ。世界中で頻発するテロや化学兵器の使用。国際平和とはほど遠い、争いだらけの世界。だからこそ、相手を心から理解したいと願う気持ち、自分を見つめ誤りを正す強い心を持たなければならぬ。「幸せに生きたい」、これは世界共通の願いのはずだ。誰もがこの希望を叶えられる世界を創るため、自分が今すべきことを精一杯取り組もうと私は決心した。

体験書籍

『母は枯葉剤を浴びた』

——ダイオキシンの傷あと——中村悟郎・著

「二ツ橋文芸教育振興会賞」

ままならぬままに

東京都 女子学院高等学校 一年

伊東朋香

「便利な」日常と「ままならないことがある」日常、あなたはどちらを選びますか。

朝、目覚まし時計の音で起き、テレビをつけて人工衛星とコンピュータが予測した天気予報を見ながら、機械で作られた洋服に着替える。コンロが焼き加減を教えてください。目玉焼きで朝食を済ませたら、ICカードで改札を通り電車に乗って学校に行く。冷房の効いた教室で授業を受け、部活を終えると携帯電話で家に連絡し、電車に乗って家に帰る。お使いを頼まれて寄った

スーパーマーケットでは自動レジで精算。夕飯は電子レンジで温めたご飯をお腹いっぱい食べて、電子辞書を片手に宿題を終える。ボタン一つで沸かしたお風呂に入り、お掃除ロボットの陰で綺麗になった部屋で就寝——このように、私たちの生活はとても合理的で便利だ。私自身、便利な商品やサービスがあれば喜んで使い、そのことに何の疑問も持たずに生活してきた。そんな私は、『ままならないから私とあなた』を読んで、冒頭の質問を突き付けられたよ

うな気がした。効率だけでは測れないことに幸せがあると信じ、自分にしか作れない音楽を求め続ける売れない作曲家の雪子と、合理性や便利さが良いと信じ、最新技術を駆使し天才発明家として名を馳せた薫。二人は小さい頃からの親友でありながら、異なる価値観を持っていた。成長と共に離れた価値観の違いは、やがて埋められない程深くなり、目を背けきれなくなったある日、二人はとうとう互いの考えを戦わせることとなる。

雪子や薫のように、私たちは異なる価値観を持っている。価値観が近い人はいるが、同じ人は恐らく家族でも存在しない。他人とであればなおのことだ。だから、人々との関係はままならないことが多くある。

私が日々それを感じるものが部活動だ。私は、学校の軟式テニス部に所属している。部活動の方針について、考え方が異なる友人とぶつかったり、相手を理解できずに悩んだりするのは日常茶飯事だ。時には悩みすぎて、体調を崩すことさえある。楽しいことばかりではないのが部活動だ。合理性を重視すれば、各々がスクールに通い、個人レッスンを受けることが、技術向上の為には一番効率が良い。薫のような価値観の人から見れば、私たちの苦労は無意味だと言われてしまうだろう。しかし私は、暑い日も寒い日も学校の校庭という決して恵まれているとは言えない環境で、皆で集まって一緒に試行錯誤することを意味がないとは思わない。偶々同じ学校の同じ部活に所属しているという共通点しかない人々と理解し合おうとしているのだから、上手いかないことも当然多い。だが、皆で協力できた時、皆に理解・応援してもらえた時は

嬉しい。この喜びは、それを乗り越えたからこそ得られたものだ。約四年半という間、自分とは異なる点を沢山持つ仲間達としか作れない日々がままならないからこそ、私にはとても大切で愛おしい。

私は、薫の描くような無駄なものを次々と削ぎ落した世間を合理的で便利ではあるが、恐ろしいとも感じている。便利で合理的になることが、「ままならないことがなくなる」ということではないかと気づいたからだ。考えてみれば、便利なものの宣伝文句はいつも「いつでも・どこでも・誰にでもできる」ことを強調している。そして今、現実世界において「誰にでも」が「人間でなくても」になりつつある。所謂二〇四五年問題だ。AI技術の進歩により、今から三十年後には、全てのホワイトカラーの労働はAIに代替できると言われている。AIが人間の存在意義を揺るがしかねないという問題に直面する現在、人間らしさについて真剣に考えなくてはならない時が来ているのだ。

便利さや合理性を求めることを完全に否定することはできない。現に私たちは便利な生活の恩恵を授かっている身であるし、

最先端の研究は正に「その人にしかできないこと」であるからだ。また、薫が雪子の力になりたいという想いで音楽ソフトの研究を続けていたように、最先端の技術に人間らしい特別な想いが込められていることもある。重要なのは、「その時・その場所で・その人と自分にしかできないこと」にこだわって生きていくことではないだろうか。たとえそれが、上手いかなかったり大変だったりしても、その先に価値を見出すことができるのが人間であり、それこそが「人間にしかできないこと」だ。

技術が目まぐるしいスピードで発展している今、三十年後の世界など私には想像もつかない。AI化の話を聞く度、将来を不安に感じる。だが私は、どんなに合理的で便利な世の中になっても、今のうちに互いに異なる価値観を持つ人々との、ままならなくとも愛おしい日常を大切に生きていきたいと思う。できないこと、ままならないことを特別なことにできるのが「人間らしさ」なのだから。

体験書籍

『ままならないから私とあなた』

朝井リョウ・著

【二ツ橋文芸教育振興会賞】

言葉という心臓

新潟県立長岡高等学校 二年

齋藤淑人

初めて嘘をついたのはいつだろう。上辺を偽ることへの抵抗感が、時間とともに薄らいでいったのはなぜだろう。私はこの夏、ある一冊の本と二年ぶりに再会した。内容は同じはずなのに、私への響き方は大きく変化していた。

中学時代、私は学校へ行くのが嫌だった。教室に居る時の、満員のエレベーターに閉じ込められているような息苦しさ。自分を嘲けるようにさえ聞こえる数々の笑いの声。人とどう関われば良いのか答えを出せず迷ううちに、気付けば私は、自分を「演じる」

ようになっていた。あなたとの会話が楽しくて仕方無い、という表情を無理に浮かべ、相手の機嫌をくすぐるような言葉を選んで並べる。人に「ウケる」ことを優先し、その場の空気のためにふざけ、時には泥も被った。そうして私が得たのは達成感だった。「ようやく自分の殻を破ることができた」と。そんな私の様子を見た父は、一冊の本を手渡してくる。太宰治著、『人間失格』である。

私の父は大の読書家だ。学生時代には、作家の研究のためにと一人海外を旅し、作

品ゆかりの地を巡ったという。そんな父が「女々しい」と評する主人公・大庭葉蔵に、当時の私は強い親近感を覚えた。人に素顔をさらすのを怖れるあまり、「道化」を演じて上辺を繕う葉蔵。私は答え合わせをするようにページをめくり、彼に共感した。そして、これこそが私の歩むべき道なのだ、と確信をもった。

しかし、高校へ進んだ私は、再び人との関わり方に迷うようになる。きっかけは、スマートフォンを持つようになって始めたSNS。相手の投稿やメッセージに対し、

言葉を取捨選択して返信する。一見、実際のコミュニケーションの過程が見事に再現されているようで便利だが、私は徐々に違和感を覚えるようになった。本来の複雑な言葉や感情をパターン化し、簡略化された文章や記号で表現するその様が、人と帳尻を合わせてばかりの私自身の態度と重なったのだ。私の人間関係への不安は膨らむばかりだった。

ある日、高校生への推薦図書として、二年前に読んだ『人間失格』が紹介されているのを見つけた。その紹介文を読み、私は衝撃を受けた。「この主人公を自分と重ねるか否かで、日本人は二分される」。私は再びその本を開いた。今と同様に悩んでいた二年前の夏のように、葉蔵の生き様に共感することで、自分の在り方への自信を取り戻そうと思ったのだ。

だが、その印象は以前と違ったものだった。もちろん葉蔵に共感こそしたものの、それ以上に、彼のコミュニケーションにおける無機質さ、人間味の無さが際立って感じられたのだ。彼が、私が求めていたのは、周囲の人にとっての予定調和にすぎない、いわば便利なスマホのような人間になるこ

とだった。ようやく、彼が自身の生き方を「失格」とした意味が理解できた気がした。そして、以前は気にも留めなかった一文が私に訴えかけてきた。「自分は、いつのまにやら、一言も本当の事を言わない子になっていたのです」。私は決断した。これからは、本音を、感情を素直に言葉にしよう、と。

私は普段の生活の中で抱えていた悩みを、初めて友人に打ち明けてみた。友人は、考えすぎ、と笑いつつも、真剣に私の話に耳を傾けてくれた。どう人間関係を築けば良いのか分からないこと、そうやって悩むあまり、時折学校へ行くのさえ嫌になること。そして、そんな毎日をやり過ごすには、自分を隠して周囲に同調するしかない、と半ば思っていること。話しすぎたかも、と心配したが、彼女はきちんと応じてくれた。まるで、二度目にあの本を読んだ時の私のように。

「それは違うと思うよ」
その言葉が、私にとって一つの答えになった。

後日、大学見学のために東京へ出た私は、その合間に父とある場所を訪ねた。太宰治

が入水したとされる川だ。そのほとりで、私は新しい決意を固めた。

近年、情報ツールの発達の陰に隠れ、かつて人の本音が見えづらくなっている。その背景もあつてか、私と同年代の子どもたちが自らを傷付け、命を絶ってしまったというケースも増えてきているように感じる。その人たちに向かって、「命を大切に」などという言葉を、私は絶対にかけれない。言葉の前で迷い、自分と真剣に向き合う余り、その命の重みに耐え切れなくなつたのかもしれないというのに……。だからこそ私は、周囲の仲間たちの本音を受けとめ、支えてあげられるような存在になりたい。綺麗に繕われた言葉を使うことが、必ずしも真つ当な生き方ではないのだから。私はそんな当たり前の、しかし忘れかけていたことを、葉蔵の姿から教えてもらった。これからの時代、この本はより一層大きな意味をもつようになるだろう。荒削りで良い。私は自分の澄み切ったままの肉声を、誰かに届けていけたらと思う。

体験書籍

『人間失格』太宰治・著

「二ツ橋文芸教育振興会賞」

ピエロに救われて

「私の頭の中には、いつの頃からか、薄命さうなピエロがひとり棲んでゐて、それは、紗の服かなんかを着込んで、そして、月光を浴びてゐるのでした。——かすかな姿態をゆるやかに動かしながら、眼付ばかりはどこまでも、やさしさうなものでした」

私は初めてこの詩を読んだ時、何故だか目頭が熱くなるのを感じた。「ああ、私の中にもピエロがいたのだ」と、素直にそう思った。自分の感情や考えが他人と違うせいかな人間関係で思い悩んでいた私は、も

やもやとして先の見えない、まるで霧の中をさまよっているかのような毎日を送っていた。常に倦怠感が付き纏い、時々焦燥感に襲われ、何もろくに出来ないまま一日を終えることに罪悪感を覚えて眠る。苦しかった。辛かった。今思えば、自分と他人の世界は違うのだという単純なことに気が付けなかった、受け入れることが出来なかった私の未熟さが原因だと思う。だが、そんな私に手を差し伸べてくれたのは、優しい眼付をしたピエロだった。

この作者の詩をもっと読みたいと図書室から借りてきて読んだ。読んでいくうちに、生きている時代も違い、会ったこともない作者のことを、以前から知っていたような感覚を覚えた。本当に不思議だった。さらに不思議だったのは、今まで読んできたどんな作品にも感じたことはなかった「愛しい」という感情が溢れてきて仕方がなかったことだった。

詩の一つに、小雨か霧雨か、雨の降りしきる中、独特な香りと雰囲気漂わせてい

静岡県 浜松市立高等学校 三年

北川奈央子

る林にたった一人で佇んでいる、そんな詩がある。最後は「せつなきことのかぎりなり」と結んであるこの詩からは、しとしとと雨の降る中、何処からか少し詰まったような澄んだ香りが漂い、それでいて冷たく、何もかも溶けてしまいうような日のことを思った。母親の迎えを嬉しいと歌っていたあの頃はとつくの昔に過ぎ去り、唯々言葉に出来ない切なさや虚しさ、何か自分の手を引いてくれるものを待つことしか出来ない、あの時間が私は苦手だ。他人に話すと馬鹿にされてしまいそうに心にしみていた感情と同じものを作者も抱いていたのかと考えると、やはり以前からの知人のような気がしてならなかった。

私が作者の詩で惹かれるのは、独特な言葉の使い方や辿々しさなのかもしれないと思っている。例えば、現在一般的に使われている「い」は「ゐ」、また「しよう」は「せう」というように表記がされている。古典を読む時の辿々しさや似通ったものを感じることが、捻ったように何処かすつと頭の中に落ちてくる言葉遣いがとても素敵だと感じられた。それがより感じられる作品で特に惹かれたのが『月夜の浜辺』という作品だ。

「月夜の晩に、ボタンが一つ波打際に、落ちてゐた」。この文章から始まる詩は、ボタンを拾う人とボタンとの、何とも言えない空間を繊細に描いている。普段なら気に留めることはないボタンに命が宿り、一つの生命体として呼吸をしている、そんな気がした。いつからそこにあるのか、誰のシヤツのボタンだったのか、たとえそんなことを考えなくとも、そのままにはしておけず拾ったボタン。私は幼い頃、浜辺で名前も知らない貝殻や、太陽の光を反射してきらきらと光るビーチグラスを集めるのが好きだった。私だけが見つけた宝物、何か魔法の力を持っているかもしれない、と、集めてきて机の引き出しの奥に大切にしまっていた記憶がある。無機質なもののややかな存在に何かを感じ、何かを思い、そのままにはしておけなかった。そこには、きつと何か通じる気持ちがあるのだと思う。

今まで何をしても晴れることがなかった気持ちちは、詩に出会うことで自分でも不思議なほど共感し、そして救われたのである。私の心に寄り添ってくれたのは、月のような静かな明るさだった。妙に心地が良く、何でも受け止めてくれそうな穏やかさを秘

めた言葉の一つ一つは、私の中に染み渡った。「こんな感情は、同じような感情を持つ人にしか理解出来ないのだろう」という思いは、この作品に出会う前も、今も変わらない。将来も変わることはないのだろう。だが、何においても自分の感情や考えで他人との隔たりを感じ、息苦しいと思うことはなくなった。苦しくも、辛くもなくなった。正確に言えば隔たりを全く感じなくなった訳ではないのだが、おそらく、似たような感情や考えを持っていたであろう作者、詩と出会うことで、逆に、他人は自分とは違う感情や考えを持っているだけなのだと気付くことが出来たからだと思う。自分の世界という殻に閉じこもっていた私は、他人の世界を受け止めることが出来るようになった。それから少しずつ自分とも他人ともしっかりと向き合えるようになり、今では充実した毎日を送ることが出来ている。この作者、詩に出会うことが出来て本当に幸せだと思う。やはり、私はあの時、ピエロに救われたのだ。

体験書籍

『中原中也詩集』 中原中也・著

河上徹太郎・編

「二ツ橋文芸教育振興会賞」

陽が昇り始めた僕等

兵庫県立北摂三田高等学校 一年

足立拓真

「自ら計らわぬ」与えられた自分の役割をただひたすら果たし、正邪のけじめはきちんとつけながらも、自分にしか利益が及ばないようなことはけつしてしない。そんな生き方が普通の人間にできるだろうか。いや、僕にはできない。じっとしていることは苦手だし、より道はたくさんしたい。他人のためではなく、自分のためにたくさん時間を使いたい。そんな僕にはこんな生き方は到底できそうにもない。

しかし、戦争という激動の時代の中、そ

う生きた人がいた。広田弘毅だ。彼は、戦争防止に努めながら、その努力に水をさし続けた軍人たちとともに処刑されるという運命に直面した。しかし、彼はそれを受け入れ、一切の弁解もせず散った。「自ら計らわぬ」その生き方を貫き通したのだ。他の戦犯たちは次々と自己弁護をし、仲間を売り、責任をなすりつけ合う中、広田とその家族は沈黙し続けた。

「だって」「でも」自分のした事を正当化するために使う言葉。目の前の責任から逃れるためにある道具。実際僕もよく使ってしまう。テストの点が悪かったりとか、試合でミスをしてしまったりした時とかに。しかし、彼はそんなものは使わなかった。それどころか「この裁判で文官のだから殺されねばならぬとしたら、ぼくがその役をになわねばなるまいね」といって、実際にその役目を担ったのである。

「責任」にきちんと向き合い、逃げることをしない。僕は、というか僕等高校生は、まだそれができていない人が多い。僕のま

わりでの話だが。

親に甘える、未成年という立場に甘える。そうやって自分を正当化したり、甘えたりすることで、まだ僕等は責任から逃れられる。

ただ、それでも中学校とは違う。義務教育という言葉が無くなったからだ。そのことで高校の先生たちに何度威されたことか。これからも年が経つにつれ、どんどんと僕等を守る言葉は剥がれていく。そしてその代わりに僕等を覆い、ついて回る責任は反比例して大きくなっていくことだろう。

ただ、高校一年生という段階の僕等は、その責任に真正面から向き合える程、強くはない。「こうなるとは思っていなかった」「別の目的だったんです」。こんなことを言えば、自分へと向けられた矛先を逸らすことができる、逃げることでできると思っている。けれど確実に逃げられなくなる日は近づいている。だから、僕等は高校のうちに色々なことに挑戦して、失敗して、学ばなければならぬのだろう。そして失敗の責任を自分で背負っていくことによって、もっと精神的に強くなっていくはずだ。

その上で、やはりまわりの人間に責任を

求めないというスタンスを作ることとは大事なのだろう。

もちろん、明らかに人のせいのことを自分の責任にされることもあるだろう。何もかも投げ出したくなることだってあるだろう。僕だってそうだし、大人だってそうだし、さすがに「だって」や「でも」は使わないにしても、責任を逃れようとする大人の醜態はテレビによく映し出されている。

しかし彼は、広田はそんなことはしなかった。彼の平和外交を邪魔し続けた軍人たちと一緒に処刑されることになっても、彼らへの恨み言は、一切口に出さなかった。そしてやはり、そういった生き方はまわりの人間に尊敬された。

今もそうだ。人に責任を被せる人間からは自然と人が離れていき、責任感のある人間には自然と人が集まっていく。僕もよく「あいつのせい」と考えてしまうことがある。そしてその度に自分が嫌になるのだ。

最初から最後まで、広田を突き動かしたのはただ一つ、「国のため」であった。国のために平和外交をし、国のために国を動かす、そして国のために死んだ。

「〇〇のため」僕が動くときの〇〇に入

る言葉は、まだ、「自分」だ。

まだ自己中心的にしか物事を見ることができないし、人に譲る前に自分がもらいうし、そんな自分本位の思考だ。たぶんこれは、僕が「欲張り」なのだからだと思う。やりたい事は一杯あるし、自分の得になる事をしたいし、その上成功したい。

だけど僕は、もう少し「欲張り」のままでもいいと思う。まだ何か一つのものを見つけたには早過ぎる。そして僕はまだ「高校生」でいられるから。

だから「高校生」でいられるうちは、精一杯欲張って、色々なものを得て、それについて回る責任に心を慣らして、そして、自分の原動力となる何かを見つけたい。

体験書籍

『落日燃ゆ』城山三郎・著

【二ツ橋文芸教育振興会賞】

「なぜ」

私の頭の中では、度々「なぜ」が飛び交っている。それはさらなる疑問に続くこともあるし、考えることに飽きてしまうこともある。飽きたら、途端に「なぜ」は消えるのだ。

私の「なぜ」はさまざま。例えば、なぜ空は色を変えるのか、なぜ蚊は人の血液を好むのかなどから、なぜ政治家は問題になるようなことを公の場で言ってしまうのかまで。身の回りのこと全部に「なぜ」はつきもので、日頃耳にする言葉、目にする文もそう。だからハリネズミにもたたくさ

んの疑問を抱いた。なぜ招待状なのに「だれも来なくてもだいじょうぶ」と書いたのか。なぜ頭の中でお茶会を済ませ、実際には招待状を送らなかったのか。

だが、わからない中で少しわかる気がした。私も友達を誘う時に、「だめならそれで大丈夫だ」とつけ加える。誘いを断りたい相手が言い出しやすいようにと自分を納得させて。だが、実際は自分のためなのだ。断られた時自分ががっかりするのを防いでいるのだ。ハリネズミは、誰も来なかった時の言い訳を準備して、一番穏やかで、一

番傷つかない方法を選択する。そうやって心の逃げ道を作るところに、私は親近感を抱いた。孤独は誰にとっても辛いものだ。

私が初めて感じた孤独は、小学三年生の時だ。クラス替えて大好きだった友達と離れ、周りのクラスメイトが不自然なくらい仲良く見えて、入り込めなかった。後から考えればたいしたことではないが、当時の私はそれが耐えられなくて、どうしようもなく孤独だったのだ。それから孤独は常に身近にある。小さな孤独は生活の中に溢れている。今はふと感じる寂しさを孤独と感

山口県立熊毛南高等学校 一年

小田 瞳

じめることは少なくなったが、数年前までは寂しいと孤独をイコールでつなげていた。孤独はどこから来るのか、これは私の長年の疑問だ。

また、私はハリネズミと張り合うほど難しい性格だ。気が強いのか弱いのかかわらないと母は言う。我が強く、はっきり物を言うくせに、何か指摘をうけると、打たれ弱く、ネガティブに考え込んでしまうからだ。だが、私に限らず、誰にでも面倒くさいところはあるのだと思う。

ハリネズミは自身の針を尖らせていて危ないから引け目に感じる一方で、自分らしさの象徴として誇らしく思っている。そのどつちつかずな気持ちに共感した。私も自分の性格について、引け目や罪悪感を抱くが、だからといって嫌だと思ったことはない。誰にでも譲れないものがあって、その思いの強さは自分を守るものだと思う。それこそ、ハリネズミの針のように。ハリネズミの針は武器である前に盾なのだ。譲れないことは人との衝突を招くという意味で面倒だが、自分を守るために必要なものだ。私はハリネズミとよく似ている。私は自分に似た人と接するのが下手だから、きつとハ

リネズミと良いお茶会はできないだろう。

世の中には時に善悪をばつさりと分けてしまふ。これは正しい、これは悪いと。少数派より多数の味方をつけた方が有利であり報道の仕方では善悪の印象が決まることもある。私はずっと、正しさや善悪は誰が作り、どうやって判断しているのか気になっていた。良くも悪くも、善悪の基準は人それぞれだと思うから。また、私たちが見ている世界は狭く、自分たちが当然と考えていることは決めつけて疑問を持たない。しかし、それでいいのか。ハリネズミはミーアキャットの「訪問というのはなんのためにあるもののな」という言葉に、答えられなかった。お茶会は家に招いて、紅茶とケーキを用意してお喋りをする。ミーアキャットは、それまであたりまえだった流れの一つ一つを全て疑問にし、ハリネズミがそれに答えられなかったのは何も考えていないからだ。当然と決めつけて疑問を持たないことが少し気味悪く思えてくる。

言いたいことはたくさんあるのに、まとまらない。きつと、私の「なぜ」が解決しないまま積み上がっているからだと思う。結局、孤独とは何か、性格は何なのか、

善悪は誰が作るのか。この本を読んで、自分についても考えることで「なぜ」はまた溢れ出した。こうしてたくさん言葉を並べても、理解には届かないのだ。ただハリネズミは空想上の訪問で悩み、考え、「また会おうね！」という嬉しい言葉を得た。それならば、私も今の思いを手紙に書いてみよう。

「親愛なるハリネズミへ。私とよく似た君にとっても感謝しています。たくさんのお思いや考えに溢れた君に、小さな勇気と自信をもらいました。私は面倒で難しい自分の性格も、こだわりが強い考え方も嫌いではありません。君も気難しくて臆病な自分を認め、理解して、好きになってください。君のおかげで多くの疑問と自分自身に向き合えました。ありがとう」

封筒に入れて引き出しにしまふ。ハリネズミには送らない。全部、空想上の出来事だ。

体験書籍

『ハリネズミの願い』 トーン・テレヘン・著

長山さき・訳

中央選考委員選評

いつてきまーす！

作家

辻原登

安光英美さんの『We』を広げて』は、「いつてきまーす！」とパンを頬ばりながら自転車に飛び乗って朝練に向かう澆刺、生気にみちた夏休みの日常のさ中に、『海と毒薬』の読書体験からアウシュヴィッツ、第二次世界大戦を、『We』と

「They」の相剋として捉える。さらに第二次大戦時、「鬼畜米英」と唱えられた「鬼畜」に当るイギリス人を父に、「咎」と罵られた日本人を母に持つ彼女自身のアイデンティティーを「We」の拡大に見出し、『We』の境界線を「They」の果

てまで広げる決意を胸に、今朝もまた自転車のペダルを漕ぐ安光さんの姿は頼もしく美しい。

辻真紀子さんの『幸せの種はそれぞれの心の中に』は、「枯葉剤という非人道的な事実を知ったのにそのままにしている自分が嫌だった」という言葉通りの、澄んだ強い倫理性を持つ現地レポートである。このレポートが私たちを打つのは、対象として存在する「悲惨」そのものよりも、その「悲惨」を前にして、立ち竦んで動けなくなる「私」の存在だ。

中村望美さんの『青い、スーッとするような絵』は、まさに読んで腑に落ち、スーッとするような

作品だ。金沢の空と仙台の空の対比、日本海と太平洋の違い、といった対比の思考から、共通点を見出していくという、より高次の思考へと移る過程が、洲之内徹の言葉を交えて、軽快に、過不足なく描かれていて快い。

「日本海も瀬戸内海も太平洋も、書き割りの富士山がある銭湯の男湯と女湯みたいに端然と分かれている訳ではない」。ウィットとユーモアに溢れた文章だ。

足立拓真君の『陽が昇り始めた僕等』は、そうか、「戦争責任」という問題を考える時、こんなふうな捉え方、あるいは「責任」の引き受け方もあるのか、と気付かせてくれた。

伊東朋香さんの『ままならぬままに』は、まさにこの回文めいたタイトルに、伊東さんのいう「人間らしさ = Humour = Human nature」の思想が表れている。「部活」にAIは役に立たない、と宣言する。AIにHumourは可能か、という問いを残して。

小田瞳さんの『なぜ』は、「孤独はどこから来るのか、これは私の長年の疑問だ」という一文を中心に、そこから言葉の階段を渦巻状

に展開していった末に、新たな「孤独」の論理＝反語的精神を発見する。最後に置かれた二行には、自らの文章を、あるいはこのコンクール自体を内側から撃つアイロニーが溢れている。

北川奈央子さんの『ピエロに救われて』。

「無機質なもののややかな存在に何かを感じる」北川さんの世界は、中原中也の詩の核心にある照応（コレスポンド）する魂に繋がっている。中也のものかと思えるような、詩魂溢れる表現がいくつも鏤められている。ピエロの魂……。

齋藤淑人君の『言葉という心臓』。最初に齋藤君に、これを読めと『人間失格』を手渡したのがお父さんだというところが面白い。息子に『人間失格』を勧める父親像が秀逸だ。何という深謀遠慮なのだろう。しかし、その深謀遠慮の先はまだ見えないが。ある日、父子で太宰入水の川のほとりに立つ姿はほほえましいと言うべきか……。

目の前の言葉への感度

歌人

穂村弘

「部活、授業、友達とのたわいない語らい」で過ぎてゆく高校生の日常と、例えば海外のテロを結びつけて考えることは簡単ではない。我々の想像力には限界があるからだ。『We』を広げて『では、その間を繋ぐものとして言葉に着目したところが素晴らしい。』

「丸太」「モルモット」「鬼畜」「ap」「ガイジン」といったラベルを貼ることで「We」と「They」の間に境界線を引く。「環境破壊、国家・人種・宗教間の争い、難民問題」といった世界レベルの問題の底には、ささやかな心の動きが潜んでいたのだ。ならば、一人一人がそれぞれの日常を生きながら、言葉と心の動きに意識を向けることが「We」の境界線を広げる第一歩になるんじゃないか。本作を読みながら、すべてが「We」になった時、そこに生まれる世界を想像した。

『「便利」な日常と「ままならないことがある」日常、あなたはどちらを選びますか』とは『ままならぬままに』の冒頭の問いかけである。作者は「便利」を「誰にでもできる」と云い換えることで本質を浮かび上がらせている。それを踏まえた上で、二者択一の思考からの脱出を試みる。自らの言葉で問題を捉える感覚の鋭さ、考えを深めていく力の強さを感じた。

『青い、スーッとするような絵』というタイトル

に、まず、はっとさせられた。読書体験記にはあまり見かけない自由さに注目したい。そのセンスは、目にしたもの、聞いた言葉、思い出したこと、感じたことを自在に結びつけてゆく本文スタイルの魅力を象徴的に表している。

『なぜ』は、その文中でいくつもの「なぜ」を積み上げながら、自分の中で無理に答えを出していない。読書体験が必ずわかりやすく現実的な「気づき」をもたらさなければならぬということはない。その代わりのように、作中のハリネズミを真似た言葉のレトリックで応えているところが創造的だ。

『ピエロに救われて』は、中原中也の『月夜の浜辺』の読み方が見事だった。「普段なら気に留めることはないボタンに命が宿り、一つの生命体として呼吸をしている」とは、一作品の読解を超えて、詩というものの本質に届く「何か」の言語化になっていると思う。

『幸せの種はそれぞれの心の中に』にはこんな一節がある。『枯葉剤作戦は別名「牧場夫作戦」と呼ばれた。つまり、米軍上層部にとってベトナム軍兵士や散布地域で暮らす人々は牧場に生える草同然の存在で根絶やしにして当然、同じ「人間」という意識は無かったのだらう。』[We] [I] [They]

を隔てる言葉への眼差しがここにもある。このような言語レベルでの感度の良さに加えて現実的な行動力にも注目した。「結合双生児ベトちゃん・ドクちゃん」のドクさんとの出逢いには驚かされた。

読書は基本的には個人の営みだが、『言葉という心臓』では、どこか様子がちがっている。お父さんと一緒に太宰治が入水した川を訪ねたり、本に触発された悩みを友達に相談したり、本を読んで考えるという行為が、自然に周囲の人々との関係性にまで広がっている。開かれた読書というものの心地好さを感じた。

『陽が昇り始めた僕等』では「国のため」に身を捨てて働いた広田弘毅へのリスペクトを語りつつ、その生き方を単純に自分に当て嵌めないところがよかった。対象との距離の取り方がクレバーなのだ。それは『落日燃ゆ』という書名と『陽が昇り始めた僕等』というタイトルの対比にも表れている。『○○のため』僕が動くときの○○に入る言葉は、まだ、「自分」だ。それでいいと思うなあ。

読書体験記を私も体験する

作家

角田光代

三十年後の未来について、私の感覚と、『まんならぬまに』を書いた伊東朋香さんの感覚はまったく異なるだろう。私には、自分とさほど関係のない架空の世界のようにしか思い描けないが、高校一年生の伊東さんには、もっと現実的な、今と地続きの「未来」だと思う。けれども、「ままならないこと」がなくなる世界を待ち望んでいないのは、伊東さんも私も同じ。伊東さんの、現実の延長線上にある未来への思いを読んで、私は深く安堵した。

齋藤淑人さんの『言葉という心臓』は非常に興味深かった。『人間失格』を違う年齢で読み、そのときどきの変化に驚くのは、じつによくあることなのだが、私が興味を引かれたのは、齋藤さんが父親とともに、太宰治の入水場所を訪れるところだ。そして齋藤さんはある決意をする。もしかしたらこの読書体験記の著者は、太宰治の描いた葉蔵とはまったく相容れない人となりなのではないか。それもまた、この感想文の不思議なおもしろさである。五年後、十年後、齋藤さんがまた『人間失格』を読みなおしたらどう感じるのか、ぜひ訊いてみたくなった。

『ピエロに救われて』を書いた北川奈央子さんの文章は本当にうつくしい。中原中也の詩が持つ、

ごつごつしながらも透明な印象を、私は北川さんの言葉にも感じた。北川さんが中原中也の詩を見つけ、共感し、「救われた」と思うのは、だからとても理解できる。私も高校生のころ、ある作家に同じようなことを思ったのを思い出した。この読書体験記は、きつと今後の北川さんの確固たる足場になる。

足立拓真さんの『陽が昇り始めた僕等』は、戦時を生きた広田弘毅と、今を生きる自身とを重ね、そして現段階におけるじつに率直な結論にいき着いた。背伸びをしていないそのまっすぐな率直さが心に残った。

年齢を重ねると、だんだん疑問を持たなくなる。そのことを私はずっと恐怖していて、だから小田瞳さんの『なぜ』を読んでよかったと思う。疑問を持たなくなる理由は、わかっているとは思われるのが恥ずかしいからであり、また、何も考えなくなるからだ。そんなことをあらためて考えさせられた。

中村望美さんの『青い、スーッとするような絵』はちよつとまとまりが悪いようにも思っているが読んでいたけれど、最後の部分のみごとな勢いに飲みこまれた。海はすべてつながっていて、だから絵の少女は普遍的な少女であるとする文章の強さ

と魅力に引きこまれた。

辻真紀子さんの『幸せの種はそれぞれの心の中に』は非常にすぐれた読書体験記だと思う。好奇心と行動力と洞察力がすぐれていて、そのことが、端整な文章からもにじみ出ている。みずからもまた差別者であると自身の内面に目を向ける鋭い批判眼もすばらしいと思う。

安光英美さんの『We』を広げて』は、読書をはじめ様々な経験から得た知識と格闘し、自身の言葉で的確に描き出した読書体験記である。私もつねづね違和感を覚えながら、でもうまく言葉にできなかった、いや、しようとしなかったことが、安光さんの言葉でわかりやすく書かれていて、驚きつつも、とても深く納得することができた。安光さんにお礼を言いたい気分だ。

自分の心に素直に！

文部科学省
初等中等教育局主任視学官

清原洋一

今年の最終審査に残った作品、いずれも読書を通して深く考え、心や行動が様々に変化している様子が描かれています。そればかりでなく、それらを素直に上手に表現していて、心に響いてくるすばらしい作品ばかりでした。

文部科学大臣賞に輝いた安光英美さんの作品は、夏休みのある日に出会った『海と毒薬』（遠藤周作・著）の本を読み考えたり、さらにこの小説が実話に基づいたものであることを知り史実にについても調べたり……。そのように実に多くの考えを巡らせています。そして、その過程の中で気づきを、同じ血の通う人間としての「We」と何か別のモノ・生物としての「They」という表現を用いながら、これらに共通する問題点をあぶり出し、自分の身近な問題として思考を深めます。思考の深さのみならず、考えを巡らせたことを見事に表現していることにも感動させられました。是非、Weを人生の中で一步一步広げていくてくささい。

全国高等学校長協会賞に輝いた二人にも、感動しました。中村望美さんの作品は、一見、高等学校全国総文祭の体験記のようですが、想いや考えがぎゅぎゅとまとまっている文章です。『青い、スーッとするような絵』と題し、仙台の空、高等学校全

国総文祭、美術館の「洲之内コレクション」の中の「ポアソニエール」と題する少女の絵、加賀の海、洲之内の伊予の海、陸前の海、東日本大震災……。様々なことを綴りつつも、『絵のなかの散歩』という本の読書体験でしっかりとつながり、「悲しみは寄り添う」その気持ちがしっくりと伝わってきます。

また、辻真紀子さんの作品も、平和に導くために何が大切か深く考えさせられるものでした。学校でのベトナム戦争での枯葉剤使用について、授業、かつて本を見たときの鮮烈な記憶、そして読書、それだけではなく、ベトナムに行くという行動力にも感心させられます。重い障害を抱えている子ども達を前に動けなくなってしまうこと、子ども達の満面の笑みに救われたことなど、それらの体験も含めよく考え、今すべきことを精一杯取り組もうという決意に感動しました。

一ツ橋文芸教育振興会賞に輝いた五作品も、心に自然に響いてきました。短い言葉ですが、私が感じたことについて示したいと思います。

伊東朋香さん、ままならないことを特別なことにできるのが「人間らしさ」、このような考えに至る過程が見事に表現されています。

齋藤淑人さん、一回目に読んだ時と二回目に読

んだ時の心の変化が綴られています。自分の澄み切ったままの肉声を、誰かに届けていけたらと思うという決意、よく伝わってきます。

北川奈央子さん、心の微細な動きが素直につづられていきます。特に最後の「自分の世界という殻に閉じこもっていた私は、他人の世界を受け止めることが出来るようになった。……あの時、ピエロに救われたのだ」の表現、心に響きました。

足立拓真さん、「自ら計らわぬ」という生き方、そう簡単にできるものではありません。しかし、「確実に逃げられなくなる日は近づいている」という覚悟をしつつ、精一杯欲張って様々なことを体験し、そして今後の原動力となるものを見つける。そうしたことを是非続けていくてくささい。

小田瞳さん、色々なことに「なぜ」と問いかけ、自分と向き合う。そういうことに考えや想いが向かう体験、ほんとうに素晴らしいと思います。

また、この八作品以外にも感動しました。これからの世の中はめまぐるしく変動していくかも知れません。そんな時代だからこそ、読書を通してじっくり物事を考え、自分の心に素直に生きていくてほしいと思います。

探求と自己批判

全国高等学校長協会

角 順二

『We』を広げて』（安光英美）は、『海と毒薬』の読書体験記である。その際に抱いた疑問を解き明かそうと、七三一部隊、アウシュビッツ等における人体実験について探求した結果、ひとつの「共通点」を発見したことが書かれている。さらに、それを概念化し、自分の言葉で提示し、さらに、WeとTheyの間に境界線を引くのは自分自身だと自己批判も行われていて、読む人が十分に共感でき、納得できる文章となっている。

『青い、スーッとするような絵』（中村望美）は、『絵のなかの散歩』の読書体験記として書かれた文章である。本のタイトル通り、高等学校全国総文祭で訪れた仙台で、偶然入った美術館で、実物の洲之内が蒐集した絵を見ることになり、いくつか鑑賞しながら、東日本大震災という不条理や、その不条理を乗り越えようとしている人々に馳せた思い等が色彩感豊かに表現されている。

『幸せの種はそれぞれの心の中に』（辻真紀子）は、『母は枯葉剤を浴びたーダイオキシンの傷あと』の読書体験記であるが、枯葉剤のことを知り、そのままにしていることができず、実際にベトナムにまで行ってボランティア活動をした時のことが書かれている。多くの人間がそうであるように自分の中にも『偏見』があったことを直視して、「枯

葉剤の問題は決して過去の歴史ではない」と、人間、平和、国際理解などについて深く考えたことがよく伝わってくる文章であることなどを特に評価したい。

『言葉という心臓』（齋藤淑人）は『人間失格』の読書体験記である。特に評価した点は、父親との関係や太宰ゆかりの地を訪れたことや、この本を読んだ過去と現在の印象の違いを対比的に書きながらSNS等、現代的な視点でコミュニケーションにおける問題について考え、本音を素直に言葉にすること、受け止めることの大切さについて書くところなどである。

『なぜ』（小田瞳）は、『ハリネズミの願い』の読書体験記であるが、「言いたいことはたくさんあるのに、まとまらない」と書いている通り、孤独と自己保身の問題、世間と自分の判断基準の違い、固定観念の問題等、どれも簡単に答えが出せないようなテーマばかりを考えた後に、ハリネズミに言いたいことを手紙に書いて、全部、「空想上の出来事だ」と締めくくっているところや、その展開の仕方などを評価した。

『ピエロに救われて』（北川奈央子）は、『中原中也詩集』の読書体験記である。繊細な精神世界にかかわる内容のことが、詩を読むことによって

少しずつ解き明かされていく過程が表現されている。締めくくりの「私はあの時、ピエロに救われた」という言葉からは、そこに込められた思いがいかに切実であるかが、よく伝わってくる。

『陽が昇り始めた僕等』（足立拓真）は『落日燃ゆ』の読書体験記である。特に評価した点は、広田弘毅の生き方から、責任とは何か、大人が責任をとるといったことはどういうことなのかについて考えながら、自己を客観的に直視して、「まだ自己中心的にしか物事を見ることができない」と、逃げずにしっかり自己批判しているところなどである。

『ままならぬままに』（伊東朋香）は『ままならないから私とあなた』の読書体験記である。これからの時代、ますます便利に合理的になるが、それは「ままならないことがなくなる」ことではないかと気づき、その上で、その時に人間にしかできないことをしていくのが、その人らしさであり、人間らしさであるということが、実体験を踏まえてよく書かれている。

第37回「全国高校生読書体験記コンクール」入賞者一覧（敬称略）

【優良賞】 39編

北海道	道立	札幌南高等学校	二年	西垣龍一	「書」かれていないものを「読」む
青森県	県立	八戸東高等学校	二年	蛭田さくら	かけがえのない今を生きるために
岩手県	県立	福岡高等学校	二年	穴牛こころ	魂でつなぐ音楽
宮城県	県立	佐沼高等学校	一年	鈴木千裕	思いやりの形
秋田県	県立	秋田西高等学校	一年	米屋結衣	誰かの神様へ
山形県	県立	山形西高等学校	二年	小池美咲	生きる
福島県	県立	福島県立視覚支援学校高等部	二年	遠藤未来	マララへ
茨城県	私立	常磐大学高等学校	二年	廣村美優	自分を好きになるには
栃木県	県立	宇都宮女子高等学校	三年	田村安嬉	「生」と「死」の狭間で思うこと
群馬県	県立	高崎女子高等学校	二年	片山紀子	「私」の夢に向かって
埼玉県	私立	早稲田大学本庄高等学院	一年	柳川幸音	居場所と成功
千葉県	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	一年	吉岡莉央	心の中の引き出し
神奈川県	私立	聖セシリア女子高等学校	二年	松下萌々夏	私の「デザイン」の教科書
富山県	県立	南砺福光高等学校	一年	杉本拓海	「何者」になる
福井県	県立	若狭高等学校	二年	高橋萌衣	二階建ての夢
山梨県	県立	甲府南高等学校	二年	田中里奈	当たり前の偉大さ
長野県	私立	松本第一高等学校	二年	加藤風香	その色を変えていくもの
岐阜県	県立	岐阜北高等学校	二年	高橋奈里	「逃げる」という選択
愛知県	県立	一宮高等学校	二年	恒川麗奈	「あきらめ」の境地
三重県	国立	鈴鹿工業高等専門学校	三年	大島元希	「終末」に向けて一直線
滋賀県	県立	安曇川高等学校	三年	大村 碧	人の役に立つこと
京都府	私立	立命館高等学校	二年	感應菜摘美	残したい記憶
大阪府	国立	大阪教育大学附属高等学校 平野校舎	二年	山口果那	現実と、理想と、妄想と
奈良県	県立	橿原高等学校	二年	林部優菜	都合のよい穴
和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	林 夏帆	迷いクジラと私

鳥取県	私立	米子北高等学校	一年	松生大介	言葉が与えてくれる力
島根県	県立	浜田高等学校	一年	山崎祐次郎	繋がるということ
岡山県	国立	津山工業高等専門学校	三年	丸尾優花	私の悪魔
広島県	私立	ノートルダム清心高等学校	二年	梶江麻衣	三つのV
香川県	県立	丸亀高等学校	一年	佐川千理	すてきな本との出会い、再び
愛媛県	県立	松山中央高等学校	二年	谷本琉華	本当の家族の姿とは
福岡県	県立	修猷館高等学校	二年	岡本彩花	客観
佐賀県	県立	佐賀西高等学校	二年	田中 結	折り鶴が紡ぐ過去と未来
長崎県	県立	猶興館高等学校	二年	門屋七海	母になるということ
熊本県	私立	九州学院高等学校	二年	荒木美柚	この声を伝えたくて
大分県	県立	芸術緑丘高等学校	一年	瀬戸みらい	美しい新鮮野菜と家族の絆
宮崎県	県立	宮崎大宮高等学校	二年	小川紗葵	思いやりをもつて踏み出す
鹿児島県	県立	開陽高等学校	三年	狩野彩葉	幸せへの新提案
沖縄県	県立	開邦高等学校	三年	ブラドリー桜シエル	希望への梯子

【入選】 185編

北海道	道立	旭川北高等学校	二年	曾根聖弥	母と私
	道立	旭川東高等学校	一年	森崎翔太郎	何者かになる者
	道立	帯広柏葉高等学校	二年	牧 陽向	のおろんがあひゆうまん
	道立	北広島高等学校	二年	廣川 諄	身体が変わっても
青森県	県立	八戸西高等学校	二年	木村友香	変わってゆくために
	県立	八戸東高等学校	二年	大村滯由	西の魔女は生きている
	県立	八戸東高等学校	二年	久保田みなみ	一生懸命生きる
	県立	弘前実業高等学校	二年	赤石綾乃	死を輝かせる生き方
岩手県	県立	一関第一高等学校	二年	小野寺眞子	その声援は、誰のため
	県立	盛岡商業高等学校	三年	丹 咲希子	自分自身を創造する
	県立	盛岡第二高等学校	一年	浪岡なつの	生きる価値
	県立	盛岡第三高等学校	二年	田鎖寛都	僕は虎にはならない
宮城県	県立	白石高等学校	一年	平間美月	苦しみの狭間で

	県立	仙台二華高等学校	一年	高田晶央	美
	県立	仙台二華高等学校	一年	本多透真	気持ちの共有
	県立	仙台南高等学校	一年	高橋柚衣	障碍と生きること
秋田県	県立	大館桂桜高等学校	二年	畠山杏優	家族とは、親友とは言葉
	県立	横手清陵学院高等学校	二年	大野いずみ	いつか来るその日まで
	県立	横手清陵学院高等学校	二年	高橋敏信	生きていくための倫理
山形県	県立	霞城学園高等学校	三年	元木美晴	生き方を見つめる
	県立	新庄北高等学校	二年	下河辺 快	寄り添う
	県立	新庄南高等学校	三年	早坂詩音	自分の人生
	県立	米沢興譲館高等学校	二年	奥山さ久来	嫌われる勇氣
福島県	県立	会津高等学校	二年	風間優里子	私を変えさせてくれた彼
	県立	安積黎明高等学校	二年	深谷あんじ	あの夏と今の私
	県立	福島県立郡山支援学校高等部	一年	木暮真瑚	繋がることは大切なこと
	私立	聖光学院高等学校	三年	伊藤成美	感情
茨城県	私立	常総学院高等学校	一年	関 祐菜	自分との競走
	私立	常総学院高等学校	一年	羽田アディールニアジ	淡色の研究
	私立	常磐大学高等学校	二年	中島菜摘	コミュニケーションの本質
	私立	茗溪学園高等学校	一年	箕田紗弓	きっかけ
栃木県	県立	宇都宮女子高等学校	二年	出水玲名	将来を切り拓く力
	国立	小山工業高等専門学校	三年	海老原一貴	人間は脆くない
	国立	小山工業高等専門学校	三年	鈴木千翔	今、伝えなければならぬこと
	県立	真岡女子高等学校	二年	大木陽菜乃	違いを受けとめること
群馬県	私立	共愛学園高等学校	三年	石原瑞紀	「普通」とは何か？
	県立	桐生女子高等学校	二年	鈴木彩花	個性があるから面白い
	県立	高崎女子高等学校	二年	永井 咲	34カ国の言葉たちが教えてくれたこと
	県立	前橋女子高等学校	二年	小坂橋天寧	過去におきたこと
埼玉県	私立	星野高等学校	二年	柏 夏紀	「わかりあえない」から始める
千葉県	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	二年	菊地元彌	これまでに感じなかった感情「孤独」
	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	二年	湊谷菜奈子	表現の自由

千葉県	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	三年	田中美由子	夢を実現させるための一步
	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	三年	牧野一哉	医療と人権
東京都	私立	女子学院高等学校	一年	小島光理	「謙虚さ」と人の喜び
	私立	東京農業大学第一高等学校	一年	大田原 舞	世界から「三つ」のものが消えたなら
	私立	東京農業大学第一高等学校	三年	渡邊優唯	才能の真価
	私立	早稲田実業学校高等部	一年	熊澤有花	人間的な人間
神奈川県	私立	聖セシリア女子高等学校	一年	水谷彩夏	内面を見つめる
	私立	聖セシリア女子高等学校	二年	佐藤梨穂香	私達が作り上げるべき性的マイノリティの社会
	県立	平塚中等教育学校	五年	河口更彩	繋いだ道
	県立	平塚中等教育学校	五年	佐藤未弥	重いふたを開ける
新潟県	私立	第一学院高等学校 新潟キャンパス	二年	星山玲奈	呪いをかけずに、「どうせ」と言わずに
	県立	高田北城高等学校	一年	松野 涼	私達の舞台
	私立	帝京長岡高等学校	二年	土田楓花	後悔しないために
	私立	新潟清心女子高等学校	一年	丸山季桜里	眩しい黄色
富山県	県立	高岡南高等学校	二年	林 理心佳	それでも、未来の自分のために
	県立	砺波高等学校	一年	栗田真帆	過ぎゆく日々の中で
	県立	砺波高等学校	二年	中川綾友	「伝える」ことの難しさ
	県立	富山商業高等学校	二年	松井瑞紀	「ビリギャル」から学んだこと
石川県	県立	金沢泉丘高等学校	一年	長谷川 愛	「生活者の音楽」も輝く
	国立	金沢大学附属高等学校	一年	高木さつき	輪を結ぶ
	県立	金沢錦丘高等学校	一年	西 紅羽	色鮮やかな日々を過ごすために
	県立	金沢二水高等学校	二年	大場有喜	陰翳と廁
福井県	県立	金津高等学校	一年	吉田千歳	弟と私、私と東田さん
	県立	高志高等学校	一年	藤田芽生	『羊と鋼の森』を読んで
	県立	藤島高等学校	一年	久保田琉仁	殺処分に怯える犬達を見て
	県立	美方高等学校	二年	行方菜花	チア女子になつて
山梨県	県立	市川高等学校	二年	大沼凜和	答えのない問い
	県立	甲府南高等学校	二年	中村友紀	移民政策―日本はどうしていくべきか
	県立	甲府南高等学校	二年	宮田瑠太	クイズを味わう
	県立	都留高等学校	一年	小笠原史妃	遠雷

長野県	県立	蘇南高等学校	一年	新谷祐果	魔女修行
	県立	蘇南高等学校	一年	深谷華花	自分が生きている今は
岐阜県	私立	松本第一高等学校	一年	滝沢未織	自分を見つめるということ
	私立	松本第一高等学校	二年	藤村 滉	それは向かい風か、追い風か
	県立	大垣北高等学校	一年	奈良千尋	「きれいな自分」と「純粋な自分」
	県立	大垣北高等学校	一年	山本夏希	私は
静岡県	県立	大垣南高等学校	二年	熊澤歩香	誰もが幸せな生活を送るために
	県立	岐阜北高等学校	一年	武藤芽久	忘れていたこと
	県立	静岡商業高等学校	三年	杉山緒理恵	思い出は生きている。
	県立	静岡東高等学校	一年	美和哲平	播種と開花
愛知県	県立	浜松城北工業高等学校	一年	大橋美月	工業高校生の決意
	県立	焼津水産高等学校	二年	藪崎壮太	生きとし生けるものの生命の尊さ
	県立	愛知県立一宮聾学校高等部	一年	藤本雪風	ゴールへの一步
	私立	栄徳高等学校	一年	清原なるみ	私は、咲く。
三重県	私立	相山女学園高等学校	一年	石川瑞彩	必要な死
	県立	豊田東高等学校	一年	西村名央	かけがえのない仲間
	私立	暁高等学校	一年	出口聖羽	僕の前向きな決断
	私立	暁高等学校	一年	安田彩乃	私の「きよしこ」
滋賀県	私立	セントヨゼフ女子学園高等学校	一年	加畑理子	「死」を見つめて生きることの意義大切さを知った私
	私立	セントヨゼフ女子学園高等学校	二年	浜口麗奈	未来と、過去の被爆国
	県立	安曇川高等学校	一年	三木はるか	努力から自信へ
	県立	高島高等学校	二年	田中沙弥	私にとっての友人とは
京都府	県立	東大津高等学校	一年	佐内香乃	現代に足りないもの
	県立	東大津高等学校	一年	中道菜月	自分の魅力は誰がつくるのか
	府立	桂高等学校	三年	高橋和奏	夢に向かって
	私立	京都女子高等学校	一年	出垣内夕葉	生きるためのスイッチ
大阪府	私立	立命館高等学校	二年	森田詩織	『リーダーになる』を読んで自己分析をした
	私立	立命館高等学校	三年	平尾まこ	敗北の意味
	国立	大阪教育大学附属高等学校 平野校舎	二年	河田彩花	ロボットとの就職戦争
	市立	大阪市立南高等学校	二年	大庭穂香	道しるべ

大阪府	府立	天王寺高等学校	一年	楠 素予佳	私を変えてくれた本
	府立	三国丘高等学校	一年	山下裕貴	僕と僕との競争（コンペティション）
兵庫県	私立	甲南高等学校	一年	渡辺大翔	幼き日の心でレンズを外すと
	県立	神戸高等学校	一年	三角まなみ	勉強すること
	県立	星陵高等学校	一年	豊田さやか	後悔のない生き方
	県立	兵庫県立農業高等学校	三年	太田 蘭	（ハリボテ）のじぶん
奈良県	県立	畝傍高等学校	一年	昆布 翔	病院にくる人々と犬達
	県立	橿原高等学校	一年	安東奈瑠映	余命わずかと告げられた時、どう行動するだろうか
	県立	高田高等学校	一年	松本美羽	『夢へ翔けて』との出会い
	私立	西大和学園高等学校	一年	西出駿太	自分の世界
和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	島 紗久弥	道しるべ
	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	高尾美結	彼を「体験」する
	私立	智辯学園和歌山高等学校	二年	高橋智大	なぜ生きる
	私立	智辯学園和歌山高等学校	二年	辻 真優	日常に潜む異常
鳥取県	私立	青翔開智高等学校	二年	谷口 凜	同じ釜の飯を食う
	私立	青翔開智高等学校	二年	山田彩加	私と周囲の人達
	県立	鳥取湖陵高等学校	三年	小山春佳	戦争を身近に考える
	県立	米子東高等学校	二年	山崎香凜	気付かない努力こそ
島根県	県立	益田高等学校	一年	棕 陽南	いのちのメッセージを心に刻む
	県立	益田翔陽高等学校	三年	寺田彩乃	文化の違いを知ることから
	県立	益田翔陽高等学校	三年	原田愛香	ミラクルだね
	県立	松江南高等学校	二年	福光莉子	戦争と平和について考える
岡山県	県立	倉敷天城高等学校	二年	赤堀由季	青春と私と部活動
	県立	倉敷天城高等学校	二年	小西真由	後悔しない人生を送るために
	県立	玉野光南高等学校	二年	林 真帆	憧れの向こう側
	国立	津山工業高等専門学校	二年	佐藤海斗	考える輩であるために
広島県	県立	大門高等学校	三年	大村千夏	人と自分をつなぐもの
	市立	広島市立沼田高等学校	二年	竹内信濃	私は鍵を拾った
	市立	広島市立美鈴が丘高等学校	一年	濱本果歩	記憶は永遠に
	国立	広島大学附属高等学校	二年	吉原那月	蜜蜂の羽音

山口県	県立	岩国工業高等学校	二年	大野隼輔	自分とチーム
	県立	熊毛南高等学校	二年	西村佳乃	諦めない自分に
	県立	下関西高等学校	一年	田中のぞみ	私にとつてのギフト
徳島県	県立	防府商工高等学校	一年	藤井美花	農業と家族
	県立	城東高等学校	一年	実松涼香	「見えない障がい」を見抜くために
	県立	徳島北高等学校	一年	川人七彩	「幸せ」とは
	私立	徳島文理高等学校	二年	天満花	自閉症について
香川県	県立	脇町高等学校	二年	佐藤 薫	本来の姿に触れる
	県立	坂出高等学校	二年	宮武 陽	踏み出す一歩
	県立	高松工芸高等学校	二年	水野志映	日々を繰り返すこと
	県立	高松高等学校	二年	藤井安曇	私が私を愛すること
	県立	丸亀高等学校	二年	宮武里名	戦争と曾祖父
愛媛県	県立	宇和島東高等学校	一年	西田俊輝	「熱中する」ということ
	県立	松山北高等学校	一年	井場木才紀	私と母を繋ぐもの
	県立	松山東高等学校	三年	内田莉菜	小説『初恋』を解く
	県立	松山南高等学校	二年	福澤咲虹	「いま、ここ」に在る
高知県	県立	岡豊高等学校	三年	荒井茉奈	ニーチェの言葉に導かれて
	県立	岡豊高等学校	三年	中西優月	弟からもらった勇氣と夢
	私立	高知学芸高等学校	二年	錨 朋佳	時間と私
	県立	高知農業高等学校	三年	山中美鈴	子どもの笑顔、私の笑顔
福岡県	県立	久留米高等学校	一年	堀田知里	意志をもつ
	県立	城南高等学校	二年	鯨島礼奈	王子様にあこがれて
	県立	筑紫丘高等学校	二年	江頭初音	私と加奈子
	県立	門司大翔館高等学校	二年	丸山由夏	今の自分
佐賀県	私立	弘学館高等学校	一年	田代香奈	西の友に捧ぐ
	私立	佐賀学園高等学校	一年	江頭暁子	今の日本に再び江戸しぐさ
	県立	佐賀北高等学校	一年	牧 一徹	命の限り生き抜いて
	県立	佐賀西高等学校	二年	關家百那	私自身の道
長崎県	県立	壱岐高等学校	二年	坂本 聖	コミュニケーションツールの固定観念
	県立	諫早高等学校	二年	平田愛佑美	私のものさし

長崎県	県立	大村高等学校	三年	宮崎美羽	「愛」と「命」と「家族」
	県立	長崎南高等学校	二年	尾上美月	笑顔を広げるために
熊本県	県立	天草高等学校	二年	菊池璃憂	「可能性」は無量大
	県立	宇土高等学校	一年	江里口まりな	「青春」を生きる
	私立	九州学院高等学校	一年	花房七緒	視線のその先に
	私立	尚綱高等学校	三年	坂口怜奈	コンプレックス
大分県	県立	大分上野丘高等学校	三年	和田弥月	プリンシプル
	県立	杵築高等学校	一年	岩下 凜	おばあちゃんが残してくれたもの
	私立	昭和学園高等学校	二年	山中希実	鉛筆より繋がる心
	県立	別府鶴見丘高等学校	二年	安部 希	陽だまり
宮崎県	県立	聖心ウルスラ学園聡明中学校高等部	三年	田中ゆりあ	勝負の秘訣
	県立	高千穂高等学校	一年	下堂蘭遼馬	平和な世界実現へ
	私立	宮崎学園高等学校	一年	清 航輔	他人との関係を越えた団結
	県立	宮崎南高等学校	一年	肱岡由杏子	さらなる高みへ
鹿児島県	市立	出水市立出水商業高等学校	三年	窪園美桜	種種雑多
	県立	鹿児島県立鹿児島盲学校高等部	三年	前畑玲雄	きっかけ一つで変わる世界
	私立	志学館高等部	二年	石塚智恵	私はここにいる
	県立	鶴丸高等学校	二年	諏訪園佳綾	生きる
沖縄県	県立	宜野湾高等学校	二年	奥間怜司	新たな一歩を踏み出して
	県立	知念高等学校	一年	宮里愛佳	葉蔵と私
	県立	那覇国際高等学校	二年	長嶺藍李	魂の言葉
	県立	普天間高等学校	三年	花城柚希	母の朝

中央入賞者8名の受賞作品、および優良賞受賞者・入選者の氏名・学校名などは、「一ツ橋文芸教育振興会」のホームページに掲載されます。(2月中旬予定)
<http://www.hitotsubashi-bks.jp>

公益財団法人 一ツ橋文芸教育振興会

株式会社集英社が創業50周年を迎えた1976年、青少年の教育に熱心であった創業者、故相賀武夫氏の遺徳をしのび、これを顕彰するために、財団法人一ツ橋文芸教育振興会を文部省（現・文部科学省）の許可を受け、設立いたしました。そして2013年4月1日、内閣府より認定され、公益財団法人へ移行いたしました。

株式会社集英社は、創業以来、文芸出版活動に力を入れ、青少年文化の普及向上に努めてまいりましたが、当財団は特に青少年期における人間形成の重要性にかんがみ、主な事業対象を高校および高校生に絞り、学校教育の助成、青少年文化の向上発展に寄与すべく、「全国高校生読書体験記コンクール」や「高校生のための文化講演会」等を実施しております。

当財団は、株式会社集英社、株式会社小学館、株式会社白泉社、株式会社ホーム社、集英社ビジネス株式会社、集英社サービス株式会社、株式会社集英社クリエイティブ、株式会社一ツ橋企画の援助により事業を運営しております。

設立の趣意にご賛同いただき、当財団の事業に対し、よろしくご協力賜りますよう、お願い申し上げます。

公益財団法人 一ツ橋文芸教育振興会（2017年12月現在）

理事長	堀内丸恵	集英社代表取締役社長
理事	國分正明	前 教職員生涯福祉財団会長
同	沼野充義	東京大学教授
同	菱村幸彦	元 国立教育研究所所長
同	村上 博	作家（辻原 登）
同	辻 一朗	歌人（穂村 弘）
同	河野光代	作家（角田光代）
同	東田英樹	集英社専務取締役
同	加藤 潤	集英社顧問
常務理事	清水章治	

公益財団法人 一ツ橋文芸教育振興会

〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋 2-5-10 集英社ビル
TEL: 03-3230-6069 FAX: 03-5211-2663
Eメール: hbk@hitotsubashi-bks.jp
ホームページ: <http://www.hitotsubashi-bks.jp>

助成申請についてお願い

国語教育研究会・高文連活動等に関する助成は、主催者からの申請によって行います。上記へご相談ください。

沿革と事業内容

- | | |
|--------|--|
| 1976.5 | ● 文部省より財団法人の許可を受け設立。 |
| 1976 | ● 「高校生のための文化講演会」事業を集英社より引き継ぐ。
高等学校へ作家・学者・文化人等を派遣、講演時間は1時間。
年間約80校で実施。
開催時、全校生徒に小冊子『読書への招待』を配布、学校図書館へは図書を寄贈いたします。 |
| 1977 | ● 高校生に対する「奨学金の給付」を開始。
(2006年より中断) |
| 1981 | ● 「全国高校生読書体験記コンクール」を開始。毎年6月に学校へ案内、表彰式は翌年1月下旬に行います。 |
| 1984 | ● 高校生実態調査への協力を開始。
高校生の生活態度・意識等を海外の高校生と比較した「実態調査報告」を全国の高校に配布、またマスコミ機関にも提供。(2013年で当財団の助成は終了。なお、この事業は独立行政法人国立青少年教育振興機構の主導となり、継続しています)。
● 災害罹災高校に図書贈呈等の事業開始。 |
| 1985 | ● 高校国語教育研究活動に助成を開始。
全国大会をはじめ、県単位の研究会に対し、講演会講師派遣などの助成を行っております。 |
| 1987 | ● 高文連の活動に助成を開始。
「全国高校生文芸コンクール」をはじめ、県単位の文芸コンクール、図書委員研修会等、講演会の講師派遣や賞品の提供などの助成を行っております。 |
| 1995 | ● コバルトノベル大賞、ロマン大賞の後援。
(2013年より共催) |
| 2007 | ● 「聞き書き甲子園」に助成を開始。 |
| 2013.4 | ● 内閣府より認定を受け、公益財団法人へ移行。 |
| 2017 | ● 第37回「全国高校生読書体験記コンクール」応募総数427校、110,190編。「高校生のための文化講演会」が52周年、開催校のべ3,982校、聴講生徒数約346万人。 |